

○平井和子* 青木洋子* 樋口 寿**

(*大阪市大・生科、**大阪女子学園短大)

目的 老人性痴呆症は脳血管性痴呆とアルツハイマー病に大別され、我が国では前者が多く発症し、老人性痴呆症の防止に脳血管疾患の予防が重要である。魚類の摂取頻度が高い場合に脳血管疾患の発症率が低く、魚に多く含まれている n-3 系脂肪酸の投与によって痴呆症状が改善されることが報告されている。そこで、高齢健常者の加齢による血清中脂肪酸組成の変動を測定し、健常者と痴呆症患者の血清中脂肪酸組成を比較検討した。

方法 50 歳から 89 歳の健常者 154 名（男性 77 名、女性 77 名）と 57 歳から 94 歳の脳血管性痴呆症患者 40 名（男性 15 名、女性 25 名）の早朝空腹時血清を試料とした。血清中脂肪酸はガスクロマトグラフィーにより定量した。

結果 健常者の男性では加齢に伴って n-6 系脂肪酸と n-3 系脂肪酸の減少、特にエイコサペンタエン酸 (EPA) とドコサヘキサエン酸 (DHA) の減少傾向が認められた。女性では両脂肪酸の加齢による差はみられなかった。n-3 系と n-6 系脂肪酸の比 (n-3/n-6 比) は男性では加齢と共に減少がみられたが、女性よりも高い傾向がみられた。健常者と比較して痴呆症患者では n-3 系脂肪酸、特に EPA が低かった。n-6 系脂肪酸も痴呆症患者で低かったが、AA は健常者よりも高かった。n-3 系と n-6 系脂肪酸の比 (n-3/n-6 比) は健常者と同程度であったが、EPA と AA の比 (EPA/AA 比) は痴呆症患者で低かった。

これらの結果は、AA の摂取を減らして EPA の摂取を増やし、それらの比 (EPA/AA 比) を増加させるように栄養指導をすることが、高齢者の脳血管性痴呆症の発症予防に役立つことを示唆している。